

箱根山地は、海に近いため夏季には湿った気流により霧が発生しやすく、雨のたくさん降るところです。たとえば、仙石原の降水量は年平均3,294.6 mmで、すぐ近くの小田原の1,955 mmと比較してもかなり多いことがわかります。

このような湿潤な気候は、5月下旬から9月頃の間霧を発生させて、コケの成長を助けます。現在までに箱根ではコケ植物(蘚苔類)が205種ほど確認されています。

箱根でも山麓では、県内各地の市街地やその郊外に分布しているコケと同じような種類が多くみられます。箱根を特徴づけ興味深いコケは、標高が800 m以上の沢筋から山頂にかけて湿度の高い地域に分布しています。

ここでは、駒ヶ岳から大涌谷に至るハイキングコース沿いに見られる主なコケを紹介します。約7 kmの登山道沿いはコケの種類が多く、しかも比較的大形の種類が多く、観察に適した場所です。このコースの観察には、ケーブルカーで、一気に駒ヶ岳まで登り、神山を経て大涌谷へ抜ける方が、逆コースに比べて疲れもなく余裕のある観察ができます。

コケ相の豊富な神山～冠ヶ岳付近

神山から冠ヶ岳にかけての帯は、国立公園内の特別保護地区に指定され

ています。そのために、小石や落ちていた小枝の類でも、厳密には許可なしに動かすことができません。それだけに自然が厳しく守られコケ相だけでなく植物相が豊かで、登山道沿いでも、いろいろの種類が観察できます。

目立つコケはハミズゴケ、コセイタカスギゴケ、オオスギゴケ、フウリンゴケ、オオカサゴケ、アソシノブゴケ、コウヤノマンネンゴケ、オオシッポゴケ、カモジゴケなどです。倒木上には、イトハイゴケ、オオバチョウチンゴケ、ケチョウチンゴケなどが見られます。

高木のブナやミズナラの樹皮上には、チャボスズゴケ、ヒムログケ、イタチゴケ、リスゴケなども着生しています。リュウブヤトウゴクミツバツツジ、アセビ、ナナカマドなどの低木の細い幹や枝上には、オカムラゴケ、ミヤマシッポゴケ、ナガスジイトゴケ、イワイトゴケなど樹幹着生種の群落が見られます。

コケの紅葉

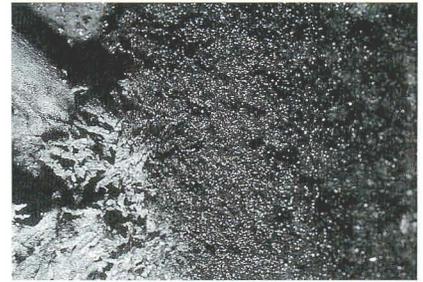
初秋から冬にかけて冠ヶ岳から大涌谷へ向かう、登山道の法面が赤紫色に色づいて見えますが、これはコケが紅葉した色でアカイチイゴケのなせるワザです。よく見ると小さな蘚類のマットが連続しているのがわかります。コケの多くは常緑で、コ

ケが紅葉するのはたいへんに珍しい現象です。大涌谷に近づくにつれ、リュウブヤアセビが増え、硫黄の臭いがしてきます。

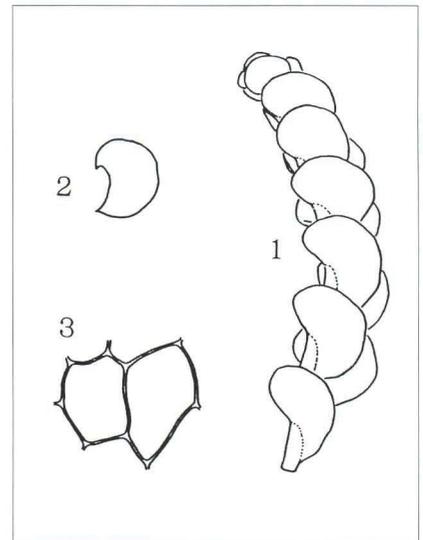
箱根の“温泉ごけ”

大涌谷の噴気孔から、流路に沿って生えている小さな緑色のコケを地元では“温泉ごけ”と呼んでいます。オONSENGOKEという和名のコケはありません。

オONSENGOKEは学問的には、苔類ツボミゴ



チャツボミゴケ (ツボミゴケ科)。硫黄泉の流水中や湿地に生育する苔類です。箱根では“温泉ごけ”と呼ばれています。

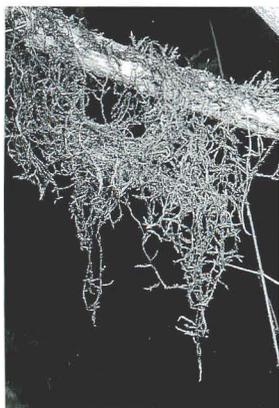


チャツボミゴケ (箱根では温泉ゴケ)の拡大図。
1: 側面からの茎の一部 (10倍);
2: 葉 (6倍); 3: 葉細胞 (200倍)

ケ科に属する“チャツボミゴケ”という茎の長さが3 cm ぐらいの小形のコケです。このコケの一つ一つの体は極めて小さいですが、群落を作ると、目立って噴気孔付近を緑色に染めます。

チャツボミゴケは、他の植物が強酸性の環境のために生育できない場所でも繁殖する能力を備えたコケです。

この他に大涌谷には、ユオウゴケと呼ばれる“植物”が見られますが、これはコケではなく地衣類です。高さが5～6 cmで灰褐色の群落をつくっています。からだ全体が樹枝状で、枝分かれした樹状の先端には赤い小さな実(子器)を着けています。



キヨスミイトゴケ (ハイヒモゴケ科)。湯本から宮ノ下間の、溪流沿いの樹枝に着生している懸垂性の蘚類です。



大涌谷の景観。硫化水素がただよい、危険なために、噴気孔付近は立ち入り禁止になっています。